

(足尾銅山鑛夫之友第二十一號附錄)

安全專一

古河合名會社

足尾鑛業所

復刻版

平成23年11月
日光市発行

はしがき

君のため世のためなにか惜しからん

すてゝかひある命なりせば

しは
と申す古歌のとほり、本當の戦争にいでゝは、彈丸の雨を冒し、劔の林に入つて、傷を負ひ、命を殞すこと、固より日本國民たる者の義務でありまして、寧ろ身の面目、家の譽として慶ぶべき事でありますが、平和の戦争とも申すべき、各自の仕事を経営して居ります間に、負傷をしたり、不具になつたり、甚しきは命までも喪つたりする事は俗にいふ犬死でありまして、これ程、世にも無益な、なげかはしい事はないのであります。

然らば此の負傷過失を防ぐには何うしたら好いかと申しまするに、各自の注意といふ事が第一であるのは申すまでもありませんが、尙ほ茲に一つの譬喩を牽いて申上げますならば、昔の武士は家の敷居を跨いで外へ出ると七人の敵があると申しましたが、この七人の敵といふ事に倣つて、今負傷の敵となるべきものの七つを挙げますならば、昔から怖いもの、譬に申す「地震」「雷」「火事」「親父」の四つに、「風」「水」「自分」の三つを加へたものであります。

まづ「地震」に譬へて申しますと、物を振ひ落したり、壊したりするもの、即ち坑内の落磐とか、土砂の崩落などから起る負傷であります。次に「雷」といふのは電氣から起る負傷、又「火事」は製煉其他火を取扱ふ所で起る

負傷けがであります。それから「親父おやぢ」は實際じつまいの親おやに限かぎらず、自分じぶんの長上めうへの人ひと又監督またかんとくしゃ者の誠いましめを克よく守まもらないために起おこる負傷けがであります。「風かせ」は壓氣あつき機き、鑿岩機さくがんきなどの取扱とりあつかひの不注ふちゆうい意いからも起おこり、又坑内またかうないの通風つうふうの加減かへんから起おこる負傷けがであります。其次そのつぎの「水みづ」は種々しゆくなる水害すうがいから起おこる負傷けがであります。最後さいごに「自分じぶん」といふのは俗ぞくに謂いふ身みから出でた錯さびで、自分じぶんの不注ふちゆうい意いや不心得ふこころえから起おこる負傷けがであります。これが一番恐はんおそろしく又多またおほいのであります。「地震ちしん」「雷かみなり」「火事くわじ」「親父おやぢ」「風かぜ」「水みづ」の六むつは自分じぶんが幾いくら注意ちゆういしてゐても、外ほかの事情じじやうのために自然しぜんに起おこるといふやうな場合はあひがないとも言いへませぬが、「自分じぶん」から起おこる負傷けがは誰たれの罪つみでもない、自分じぶんの過失あやまちでありますからこれは最も慎もつとつしまなければなりません。

然らば自分だけが安全でさへあれば、人は何うでも構はぬかといふに、決して然うではありませぬ。自分の不注意から過失が起つて、自分は無事だが、他の人に大變な負傷をさせるといふやうな場合は随分あるのであります。殊に山林や坑内などに於きましては一本の燐寸、一服の烟草から多數の生命財産を失ふやうな大變災が起らぬとも限らないのでありますから、自分の事を大切に守ると共に、他人の事をも大切に考へて、相互に克く氣を付けるといふ心懸けが肝要であります。

そこで今度「鑛夫之友」の附録といたしまして、この「安全專一」と題する本を當山の勞働者諸君に配賦することゝいたしました。「安全專一」とは讀んで字の如く、諸君が日々の仕事をせられる間に、前申すやうな自分

の身を守り、併せて他人の身を守り、何人にも負傷過失のないやうにする心得、即ち安全といふ事を始終心懸けて、それを各自の習慣性としたいといふ意味でありまして、諸君が此本に書いてある事柄の中、自分の仕事に關係のある部分を繰返し能く讀んで、怠らずそれを實行せらるゝならば、恐らく將來諸君の身に負傷過失は無くなつてしまふだらうと信ずるのであります。

尙思違ひのないやう念のため申上げて置きますが、「安全專一」といふ事は各自の體さへ大切にすれば、仕事の方は何うでも好い、仕事よりも體が大事だといふ意味では決してありません。すべて現場の仕事には全く危険がないといふものは滅多にありません。時としては進んで其危険を

冒すといふことが、自分の職務上必要な場合もあるのです。こんな場合に、「まづ安全が第一だから」といつて尻込みをしまつては自分の職務は勤まらないことになつてしまひます。茲に安全第一と申すのは仕事を本位とした安全第一でありまして、安全を本位として仕事をするといふ意味ではありません。そこで私は特に諸君に向つて

危険に負けるな危険に勝て

といふ一言を進して置きます。「危険に負けるな」とは危険といふ敵に出會つたとき、怖れて逃げてはいけないといふこと、「危険に勝て」とは進んで危険といふ敵を撃破り、取擢いで、勝利を占めるといふ意味であります。平和の戦争たる各自の仕事の上に起る危険は「注意」といふ彈丸を

以て、これを撃破することの出来ないやうな強敵では決してありませぬ。
否、必ず撃破することが出来るのであります。決して怖れて逃げる必要はな
いのであります。然らばこの「注意」といふ彈丸は何處に在るか。諸君の
頭の中に在る。「注意」といふ彈丸を造る材料は何處に在るか。この「安
全専一」と題する本の中に在る。といふことを克く心懸けて、其日く
の務めとせられるやう、希望する次第であります。

大正四年一月

足尾鑛業所長

小田川全之

注意

「安全專一」に心得ふべき個條は大體仕事別に順序を立て、編纂いたしましたが、其内には重複を避けるために、一方には掲げてあるが、一方には略してあるやうな事柄も大分あります。例へば火藥類取扱ひの心得は採鑛の部に入れてあります。又機械運轉の心得は機械の部に入れています。また機軸製造煉其

他機械を用ひてゐる工場では總べて心得て置かなければならぬ事柄であります。そんな譯でありますから、編纂の區別には重きを措かないで、いやくも自分の仕事に關係のある事柄について的心得は、どれも克く讀んで、實行して貰はなければなりません。「安全專一」の心得には各自の領分といふやうなものはありませぬ。容器は別でも中味は共有と御承知を願ひます。

編者

安全專一 目次

目

總體の心得……………一

第一 採 鑛……………四

火藥類取扱ひの心得……………四

坑内に居るときの心得……………一四

支柱に就ての心得……………一八

切端に就ての心得……………一九

電車に就ての心得……………二〇

堅坑に就ての心得……………二二

次

手子運搬の心得……………二五

第二 製 煉……………二七

一般の心得……………二七

焼熔工場で働く者の心得……………二八

團鑛工場で働く者の心得……………二九

熔鑛工場で働く者の心得……………三〇

煉銅工場で働く者の心得……………三二

第三 電 氣……………三七

一般の心得……………三七

第四 機 械

電氣夫の心得	三九
電動機 モーター 運轉の心得	四一
電車運轉の心得	四五
トラベリング運轉の心得	四八
機械運轉の心得	五一
機械製作修繕の心得	五四

第五 土 木

土 木	五六
-----	----

土工石工の心得	五六
大工鳶夫の心得	五七

第六 運搬	六〇
-------	----

一般の心得	六〇
鐵索に就ての心得	六一
馬車に就ての心得	六一
電車に就ての心得	六二

第七 林業	六三
-------	----

伐木に就ての心得	六三
木材運搬に就ての心得	六五
第八 導火製造	六八
一般の心得	六八
仕事場の心得	六九

安全專一

總體の心得

一 酒を飲んで仕事場に出てはならぬ

一 仕事服は洋服、法被、其他體にピッタリと密着くものを着なければならぬ

一 仕事中に傍見、坐睡、雑談などをしてはならぬ

一 すべて機械は故障のないことを確めた上で使ひなさい

一 大勢同じ場所に集つて仕事をするときには相互に氣を付けて混雜を避

けなければならぬ

一 どんな場所にゐても火の用心といふことを忘れてはならぬ、殊に木屑の散ばつてゐる所、落葉、枯草などのある所で焚火をしたり、烟草を喫んだりしてはならぬ

一 自分の取扱ふべきものでない機械や器具に漫に觸つてはならぬ

一 變事があつたとき又は危険を認めたときには、直に係員に知らせなさ

い
一 休日の翌日には兎角疎漏がちで負傷が多いから、ウツカリして過失をせぬやう克く氣を付けなければならぬ

以上いじやうの心得こころをつばめて言いへば、つまり「常つねに氣きを確たしかに持もつて、克よくく萬事ばんじに心こころを配くはる」といふ事ことであるから、この一言ごんを忘わすれてはならぬ

第一 採 鑛

採

採鑛の仕事は主に坑内の仕事である。坑内は一番負傷の多い所である。だから坑内に働く人は一番克く注意せねばならぬ

火薬類取扱ひの心得

一 火薬渡場の前では必ずカンテラの火を消さなければならぬ

一 火薬渡場の前でカーバイトの詰め替をしたり、マッチを摺つたり、煙

草を吸ふたりしてはならぬ

一 使残りの火薬は必ず毎日火薬函と一しよに火薬渡場に納めなければならぬ

らぬ

一 火藥を坑外へ持つて出たり、吠の中へ入れて置いたり、砵の下へ隠して置いたりするのは大禁物である

一 火藥函は水に濡らさぬやうにしなければならぬ

一 火藥函の懸紐の切れたり脱れたりすることのないやうに氣を付けること

一 雷管は紙包にして火藥函へ入れること

一 火藥函を持つてケージを昇降するときには必ずカンテラの火を消すこと

一 火藥函を持つて坑井を昇降するときには函を櫂がけに背負ひなさい

一 火藥函は成るべく切端に近い、安全な、而して水氣のない所へ置きな

さい

一 發破はつぱをかける前さへには先づ第一だいいちに火藥函くわやくはこを安全あんぜんな所ところへ持出もたし、それから

道具たうぐの始末しまつをすること

一 火藥くわやくはこれから使つかはふとするときのほか火藥函くわやくはこから出たしてはならぬ

一 火藥くわやくをレールや電氣機械でんききかいの傍そばに置くことは危険きけんである

一 火藥函くわやくはこを棄すてたり毀こはしたり失なくしたり又切端またきりはから外ほかの所ところへ持もつて行いつ

たりしてはならぬ

一 退業たいげふのとき火藥函くわやくはこを納なめることを他ほかの者ものに托たのんではならぬ

一 爆藥ダイイを嚙かんだり口くちへ入いれたりしてはならぬ

一 爆藥ダイイの凍こつたのをカンテラの火ひや電燈でんとう又は熱ねつしたる機械きかいなどで溫あためて

はならぬ

一 凍つた爆藥を落したり切つたりすることは甚た危険であるから使はな
いで其儘係員へ還すこと

一 黒色火藥と爆藥とを混せて用ひることは係員の指圖を受けたときの外
は禁物である

一 雷管は櫻印の爆藥には六號を用ひ、椿印の爆藥には三號を用ひ、取
り違へぬやうにすること

一 雷管は時々其數を算へて見て、若し一つでも失くしたときは直に係員
に届出ること

一 雷管を落したり、中をほじくつたり、踏んだり、置き忘れたりしては

ならぬ

一 導火は折目があつたり濕つたりしてゐるものを用ひてはならぬ

一 發破をかけるとき導火が短か過ぎると大變危険であるから好い加減の

長さにして置かなければならぬ

一 導火を切るには克く切れる刃物で眞直に切らなければならぬ、道具で

叩き切るのは禁物である

一 導火に火を付けるときは其尖端を揉んで付けること

一 電氣發破の導電線は折れたり急に曲つたりせぬやうにすること

一 電氣發破の導電線を結付けるには、其の接合せる所をきれいにし、兩

方とも能く捻じ合せ、繼目はテープで巻くことを忘れてはならぬ

- 一 大切な機械其他の設備をしてある場所の間近で發破をかけるときには先づ發破除けの設けをしてからでなければならぬ若しそれが水路、豎坑、坑井などの傍であれば礮の飛込まぬやうにし、レールの傍であれば、飛散つた礮は直ぐ拂ひ除けなければならぬ
- 一 導火を雷管の中へ締付けるには成るべくペンチを使ふのがよろしい又導火の切口を新しくして雷管の底との間の隙を一分位にしなければならぬ
- 一 水のある場合は導火と雷管の附根はびんつけのやうなもので固めること
- 一 導火を爆薬に嵌めるには、まづ爆薬の片端の包紙を開き、木の細い棒

で孔あなを穿あけこれに導火みちびを嵌はめて包紙つみかみを導火みちびの周圍まわりに寄よせ、絲いとで縛しばるこ
と

一 爆藥ダイを二つ以上いじやう一所しよに使つかふときには兩方りやうはうの包紙つみかみの小口こくちを破やぶつて繼合つぎあはせ
ること

一 爆藥ダイに尻管しりくわんや中管ちゆうくわんを使つかふのは何なんの役やくにも立たたぬものであるし又危またあぶない
から使つかつてはならぬ

一 發破はつぱの孔あなに爆藥ダイを詰つめるときには、豫め孔あなの深さふかを測はかつて置おき、そろ
く押込おしこんでから、又込棒またこめぼうで其深さそのふかを測はかり、爆藥ダイがよく孔あなの底そこまで届とど
いたかどうかを確たしかめるやうになさい

一 アンコを詰つめるには木又きまたは真鍮しんちゆうの込棒こめぼうで靜しづかに押込おしこめ、決けつして強つよく突入つきい

れてはならぬ

一 發破はつぱをかけたために磐いはが熱あつくなつたときは、それが冷ひえてからでなければ次の發破はつぱを込こめてはならぬ

一 發破はつぱをかけやうとするときには先まづ其事そのことを近くちかに居をる者もの總すべてに知らさなくてはならぬ、若もし其その近くちかに人ひとの通とほる路みちがあるならば豫あらかじめめ合圖あひづをして發破はつぱのすむまで人ひとの近寄ちかよらぬやうに注意ちゆういして置おくことが最も大切もつとたいせつである

一 いよく發破はつぱに火ひを付つけやうとする前まへには、自分じぶんたちの逃路にほみちにある邪魔物まじものを取除とりのけ、足場あしはの吟味ぎんみをして置おかなければならぬ、而そして火ひを付つけたらば急いそいで安全あんぜんな場所ばしよに退のかなければならぬ

- 一 發破がすんだときは直に又近くの人に合圖で知らせ、礮や切端の浮石を取除け、自分にも人にも危険のないやうに始末しなければならぬ
- 一 一時に五個以上の發破に火を付けるのは危険であるから、五個以上の場合は二度に分けて火を付けること
- 一 發破は火を付けた數だけの音を聞いてからでなければ、すんだといふ合圖をしてはならぬ、若し不發のものがあつたときは少くも十五分間經つた後でなければ決して切端へ近寄つてはならぬ
- 一 發破が不發であつたときは其孔を掘返さないで、一尺以上離れた別の所に新に孔を穿るやうにしない、此の孔を穿る所は前の孔と違つた向でなければならぬ、又礮に切目などがあると前の孔の中の不發の發

破はが不意ふいに爆發はくはつするやうなことがあるから克よく氣きを付つけなくてはいいけない

一 不發ふはつの原因げんが途中ちゆうで導火みちびの消きえた爲ためであるときには、其導火そのみちびに再ふたび火ひを付つけるのは甚はなだ危險きけんであるから、そんな時ときには係員かくりんの指圖さしづを待まちちなさい

一 電氣發破でんき はつはに火ひを付つけることは必ず係員かくりんにやつて貰もらふので、自分勝手じぶんがってにやつてはならぬ

一 電氣發破でんき はつはをかけた後あとでは係員かくりんの指圖さしづあるまで切端きりばに近寄ちかよつてはならぬ

一 中拔發破なかぬきはつはと上下左右じやうげきの拂發破はらひはつはとを同時どうじに行おこなふことは危險きけんであるから、これは別々べつべつに行おこなはなければならぬ

一坑内かうないで火藥くわやくを運搬うんぱんする者は必ず赤い角燈かくとうを持つて歩かなくてはならぬ
 一火藥類くわやくるいを運搬うんぱんする器うつはは安全裝置あんぜんさうちを施ほどこしてあるものを使つかはなくてはならぬ

坑内かうないに居をるときの心得こころえ

一下駄ひたを穿はいて入坑にようかうしてはならぬ

一坑内夫かうないふはすべて帽ぼうを冠かぶり、鑑札かんさつを携たづへ、カンテラと濕しめらぬ容器いれものに入れたカーバイトと、マツチ入れに入れたマツチを持つことを忘わすれてはならぬ

一無斷むたんで見張所みはりじよや機械場きかいばや火藥渡場くわやくわたしばや、物置もの置き、水溜みづため、喫飯場めしくひばなどに入つてはならぬ

一 丹礬水で眼を傷めることのないやうに注意せねばならぬ

一 大廊下を歩くときは體は固より、自分の持つて居る道具でも電線に觸

れぬやう氣を付けねばならぬ

一 暗い所から明い所へ、又明い所から暗い所へ行くときは餘り急いではならぬ

一 坑井を登らうとするとき又は坑井や棚の下などを通らうとするときには、先づ大聲で「落すなあ」と呼び、「おーい」といふ返事を聞いてから行くこと、又通つてしまつたら、「よーし」と合圖すること

一 坑井を通るとき又は大勢込合つてゐる場所では、第一に火薬函に氣を付け、次に持つてゐる道具を落さぬやうに氣を付けること、若し斧や

鋸のぎを持つてゐるときは刃はを露あらはさぬやうにすること

一 坑井かうゐの梯子はしごに碁ずのかゝつて居るとき又はバツタリ板張いたはりなどの毀これてゐるとき、梯子はしごのぐらついてゐるときなどは其その坑井かうゐを通つてはならぬ

一 坑井かうゐのバツタリは通つた後あとで必ず元もとのやうに閉しめて置くこと

一 坑道かうたうを通るときはレールの引違ひきちがひや坑道かうたうの分れ目わかめに氣きを付けること

一 前方むかふからでも後方うしうからでも電車でんしゃが來たときには、電車でんしゃの通つてしまふ

まで立停たちとまつて安全あんぜんな所ところへ體からだを寄せて居ゐること

一 勾配こうはいの強い坑道かうたうを通るときには、手押鑛車ておしくわうしゃの走る響おとを聞き分け、鑛車くわうしゃ

の近ちかづかぬ間まに通とほること

一 便所べんじょでない所ところに大便たいべんをしてはならぬ

- 一 危険の場所、危険の事柄を發見たものは直に係員に知らせなさい
- 一 ボロ、木屑、糸屑、藁、藁、蓆などを燃してはならぬ
- 一 仕事に用のない物を持つて入つてはならぬ
- 一 いたづらに物や礮を投つたり投込んだりしてはならぬ
- 一 冠の低い坑道で磐に頭を打付けたり、電線に觸つたりせぬやうに氣を付けること
- 一 機械や電線、電燈、鐵管のバルブなどには一切手を觸れぬこと
- 一 梯子を昇降するには梯子の親柱を握らないで、兩手を子にかけながら、段々に昇降すること
- 一 複線の廊下を通るときには荷道と空道とを辨へ又赤色の電燈のある所

は危険注意の表號であることを知つてゐなければならぬ

支柱に就ての心得

一 支柱が曲つたり傾いたり又支柱の間や坑道の冠から礫が揉めて落ち

たりするのを見たときには直に係員に知らせなさい

一 大廊下に支柱假棚を設けるとときには少くも五尺以上の高さにしなくて

はいけない

一 右の假棚に梯子を用ふる場合にはレールから相當に離して電車の通る

妨げにならぬやうにして置かなければならぬ

一 すべて支柱普請は仕かけた仕事を仕遂げないで退業してはならぬ若し

退業しなければならぬときには跡の危くないやうにして置かなければ

ならぬ

一 釘の刺つた板、梯子、古木などを坑道に投放しにして置いてはならぬ

切端に就ての心得

一切端に就いたときは先づ鋤で磐、引立、冠などを叩いて見て、其響で石目、利石、浮石などを判断して、これを拂つた後仕事にかゝる段取

をしなさい

一 大石や大浮石は叩き所に依つて一向それらしくない響を發すること

があるから早合點をしないやうに克く氣を付けなければならぬ

一切端に不時の射水のあつたときは危険の前兆であるから直に係員に知らせなさい

一切端が舊い坑に貫通つたときは、其坑の中へ入らぬやうになさい

電車に就ての心得

一電車を運轉する者は次の場合には必ず鈴を鳴らし且つ速力を緩かにし

なさい

イ) 電車と電車のすれちがふとき

ロ) 坑道の分れ口に來たとき

ハ) 坑道の曲つた所に來たとき

ニ) 棚の下を通るとき

ホ) 火藥運搬人の見えたとき

ヘ) 前に邪魔物のあるとき

(ト) 前方を見透し難いとき

一 機關車の燈が消えたときには直に進行を停めて、燈のついた後再び進行を始めなさい

一 進行中の電車に對して其進行を停めさせやうとする場合又は何かの危険を知らせやうとする場合には、カンテラを右左に振つて合圖をしない

一 電車運轉の職でない者は決して機關車に乗つてはならぬ

一 電車は必ず定められた線路を通ること

一 必要已むを得ない場合の外はドロリーホキールを反對に向けて電車を走らせてはならぬ

一 電車がレールの曲つた所又は分れ目の所を通るときには一層トロリー

ホキールに氣を付けること

一 レールの上に砦其他の邪魔物が載つてゐるときには直に電車の進行を
停め、邪魔物を取除けた上で更に進行すること

一 故障があつたり毀れたりしてゐる鑛車を繋いで走つてはならぬ

一 電車の走つてゐるときに鑛車の上に飛び乗つたり飛び降りたり、又鑛
車の間に這入つたりしてはならぬ

豎坑に就ての心得

一 豎坑監視人交代のときは必ず信號裝置、豎坑及びケーシの安全裝置を
十分検査しなくてはならぬ

一 捲上げ、捲下げに關する信號は堅坑監視人自ら信號して、決して荷取

夫などに托せてはならぬ

一 堅坑監視人は音信管や電話で手早く必要な打合せをすること

一 堅坑監視人は時々自身ケーシに乗つて見て、昇降の具合を調べ又堅

坑内の枠組、摺木、キープス、信號裝置などに故障の無いやうに調べ

なくてはならぬ

一 堅坑監視人以外の者は堅坑の信號裝置、キープス、ケーシの安全裝置

に手を觸れてはならぬ又ケーシの間を通抜けたり、堅坑の中を覗込ん

だりしてはならぬ

一 ケーシには決して急いで飛乗つたり飛降りたりしてはならぬ

一 豎坑監視人は豎坑のバツタリの開閉やキープスの取扱ひに念を入れて、

ケージに乗降する者に危険のないやうに心懸けねばならぬ

一 豎坑監視人はケージに鑛車や荷物を載せるとき其の具合を一々検査し、
ケージの運轉中に積荷が轉げ出るやうなことのないやうに氣を付けな

ければならぬ

一 豎坑監視人は鑛車をケージに乗せるとき砦の落ちないやうにし、且つ
運轉を停めて居る間はケージやプラットを掃除しなさい

一 ケージには決して定員以上の人を載せてはならぬ

一 捲上げ、捲下げの信號をした後は、決して人をケージに乗込ませては
ならぬ

一 捲揚綱は時を定め嚴重に検査せねばならぬ

手子運搬の心得

一手押運搬をするものは、鑛車の前に燈火を附けて進行の合圖とし、バ

ツタリの栓を嚴重に卸して置かなければならぬ

一 鑛車には鉋や礮を山盛りにしてはならぬ

一 堅坑のプラットに鑛車を停めやうとするときには、前の鑛車に衝突ら

ぬやう、靜に押して行かなければならぬ

一 臺車や鑛車を手放しで走らせたり、濫に乗込んだりしてはならぬ

一 坑井に鉋下るとき、上に居るものは必ずブレーキを使はなくてはなら

ぬ

一 鉋下中、下のものは坑井の眞下にゐたり坑井の中を覗込んだりしては

ならぬ

一切端の砦足場の砦を取り過ぎるのは危いから氣をつけなさい

一 鑛車から坑井へ砦を明けるときには必要に應じ鑛車の覆らぬやうに突張をして置かなくてはならぬ

一 坑井に砦を明けるときには坑井の中を人が通つて居らぬことを確めた

上にしなくてはならぬ

一 鉋下ロープを坑井に垂懸けたまゝ退業してはならぬ

一 鑛車や臺車を途中に置放しにして交代したり退業したりしてはならぬ

第二 製煉

製煉では主に極く熱の高い物や、重い鑛石や、煙氣を發する物などを取扱ふので、いろいろの危険が伴ひ易いから、十分克く注意せねばならぬ

一般の心得

一 許可を得ないで自分の仕事場を離れたり他人の仕事場へ入つたりしてはならぬ

一 道具、品物何によらず放つたり投げたりしてはならぬ

一 運轉して居るバケツト、エレベーター、コンベーイングベルトなどの上に乗つてはならぬ

一 捲揚機の臺車、鐵索の搬器又はクレーンの鉤に乗つてはならぬ

一 鉸、緩、銅の熔けたのが水に觸れると爆發をする虞があるから、熔鑛

工場や煉銅工場の附近に水を撒いてはならぬ

燒熔工場で働く者の心得

一 八角鑿で氣孔を作るときには、火の粉が壺の中から飛び散るから用心

せなければならぬ

一 壺の中から焼けた鑛石を出すときには、先づ笛を吹いて附近の者に注

意しなければならぬ

一 焼けた鑛石を碎くときは、破片が飛散つて、火傷したり、眼の中に入

つたりするのを避けなければならぬ

一 壺ポットの回轉くわいてんは徐々そろそろとやらなければならぬ

團鑛工場たんくわうこうちやうで働く者の心得はたらきものこころえ

一 機械きかいの運轉うんてんを始はじめるとき及び停とめるときには、運轉夫うんてんふは笛ふえを吹ふいて合あひ圖づをするこゝと

一 團鑛機たんくわうきのクラツチの開閉あけしめは運轉夫うんてんふ以外いぐわいの者ものがしてはならぬ

一 團鑛機たんくわうきの掃除さうじは運轉中うんてんちゆうにしてはならぬ、若もし已やむを得えない場合ばあひには熟じゆく練れんした者ものが掃除さうじすること

一 運轉中うんてんちゆうの機械きかいに油あぶらを注こすときには、足場あしはに氣きを付つけて、機械きかいに觸ふれぬやうにすること、ミキサミキサの掃除さうじをするときも同様どうやうである

一 打拔うちぬきスタンプで團鑛たんくわうの拔ぬけなかつたときは、女工ぢやこうは自分じぶんで手てを出ださな

いで、運轉夫に知らせなさい

熔鑪工場で働く者の心得

(装入床)

一 装入床のトロ運搬は能く附近に眼を配つて、衝突つたり、轉覆へつたりすることのないやうに氣を付けること

一 装入庫から装入物を抜取るときは必ず徐々とやること

一 爐の戸の開閉にハンマーやシャブルを用ひてはならぬ

一 すべて鎚を用ふるときには側見をしたり談話をしたりしないで、眞面目に打たなければならぬ

一 ハンマーや八角鑿は打所の尖つて居るものを用ひてはならぬ

一 爐付職工は爐の周圍を常に能く掃除して置かなければならぬ

一 空氣上昇又は瘤取のときには爐から噴出る火粉に氣を付けること

(羽口)

一 羽口の石炭裝入又は羽口の開通をなすものは、羽口の内から飛んで出る物に觸はらぬやうにすること

一 羽口の二重蓋の間に指端を挟まれぬやうに氣を付けなさい

一 常に能く水套の排水に注意して、若し蒸氣を認めたときは係員に知らせなさい

せなさい

一 熔鑛爐の周圍や、前坩、鉞壺の地並では水を餘り用ひてはならぬ

一 前坩の蓋の上を猥りに歩いてはならぬ

一 鉋樋かほひの上を飛び越えたり歩いたりしてはならぬ

一 吹立ふきたてのときは水套タンプ、給水きふす、排水はいすなどに能く注意ちゆういすること

一 吹立ふきたてのときは悪い瓦斯わるガスの洩れ出る虞おそれがあるから、下したに働いて居るものは能く注意ちゆういすること

煉銅工場に働く者の心得

一 オペレーティングバルブの取扱とりあつかひは克よくく念ねんを入れて徐々そろそと運轉うんてんしなければならぬ、又運轉またうんてんが終つたときはハンドルにピンを挿さすことを忘れわすてはならぬ

一 コンバーターの中なかへクレーンボートで熔鉋とけかや其他そのたの物ものを入れたときは、クレーンが他ほかの方ほうへ移うつつた後のちでなければ、コンバーターを廻轉くわいてんしては

ならぬ

一 熔けた鍔や銅をコンバーターから出すときには極く靜かにコンバーターを廻轉しなければならぬ

一 熔けた鍔や銅は壺に九分目より多く入れてはならぬ

一 コンバーターの附近は常に克く掃除せなければならぬが、水を撒いたり、水溜をこしらへてはならぬ

一 熔けた鍔、鍔、銅を受ける壺の内部は克く乾いて居るものでなければならぬ

一 アノード板の注手は必ず體に莖を懸けること

一 濡れて居る鑄型に銅を注込んでならぬ

一 鑄型に入れた銅のまだ十分固まつてゐないのを水の中へ落してはならぬ

一 鍍流し場では成るべく水を少く使ふやうになさい、若し水溜ができたときは直ぐ乾すこと

一 ライニング修繕のため爐肌を冷すときには、風箱の上に立つて水管や風管を扱ひ決して縁に上つてはならぬ

一 煉銅鍍を流すときはクレーンの運轉夫は信號をすること、此信號を聞

いたときは其附近に居る者は早く退けなければならぬ

一 吹き過ぎて硅酸銅のできたときは係員の指圖を待つこと、決して注鉋などをしてはならぬ

一 すべて濕氣のある物は銅屑其他何んでもコンバーターの中へ入れてはならぬ

一 コンバーター其他重い物をクレーンで吊るときには、鉤が正しく掛つて居ることを確めた上で、クレーンの運轉夫に信號すること

一 クレーン運轉夫に對する信號はすべて呼笛を用ひること、又係員、工手、夫頭以外のものはクレーンの運轉夫に指圖してはならぬ

一 フードの烟灰落しときは克く脚下に氣を付けること

一 クレーンの運轉夫はコンバーターに鉋を注込むときはコンバーターが廻轉を停めてゐるときでなければならぬ

一 クレーンの運轉夫はコンバーターの廻轉中其真正面にクレーンを停め

てゐてはならぬ

クレーンうんてんの運轉夫は電氣でんきの部ぶにある「トラベリングクレーンうんてん運轉」の心得こころえを參照さんせうすること

第三 電氣

電氣に由る負傷はさう澤山はない。其代り稀にあると大抵大負傷である。
克く注意せねばならぬ

一般の心得

一 電柱や電線には成るべく觸らぬやうになさい、殊に暴風雨、雷鳴、雪の降つたときには一層氣を付けて觸らぬやうになさい

一 電柱、腕木、碍子を赤く塗つたのは危険であるから傍へ寄らぬやうになさい

一 電柱や電線の近くで火事のあつたとき、素人が及物を以て電線を切つ

たり、電柱を倒したりするのは、危険であるから、してはならぬ

一 電柱、腕木、電線又は其れに續いて居る物などが火花を發してゐるのを見たら人は直ぐ電氣係員に知らせなさい

一 電線が切れて垂下つてゐるのを見た人は決して其れに觸つてはならぬ、若し何うしても其れに觸らなければならぬやうなときには乾いた布で厚く手を包み、乾いた長い竹か木を持つて靜に動かすやうになさい

一 職務以外にはすべて電氣の機械に觸つてはならぬ

一 電車のトロリー線には、體は勿論、持つてゐる道具でも觸らぬやうになさい

一 電車の通るレールの上は成るべく歩かないやうになさい

一 仕事の都合で一時電燈線や電話線を動かさなければならぬやうな場合は、勝手にやらずに、豫め電氣係員に知らせなさい

一 室内用の電線を包んである絲、ゴム、布などは傷を付けぬやうに取扱はなくてはならぬ、若し傷が付いたときは速座に電氣係員に知らせなさい

一 電燈線を釘其他の金屬に引懸ることは禁物である

電氣夫の心得

一 發電機のブラシを動かすときは必ず手袋を付けよ

一 ブラシの位置に克く注意して、整流子の上のスパークを少くせよ

一 變電所、發電所に於て、他からの請求によつて油入開閉器を切つたと

きには又同じ人からの請求のあるまでは再び開閉器を入れてはならぬ
 一サーキットブレーカーが飛んだとき、これを再び接続いで、其下の開閉器を入れるときには、必ず自分の顔をブレーカーの方に向けずにやうにせよ

一動力線や電燈線を取扱ふには、いつでも電氣が通じて居るものと思つて注意して取扱はなくしてはならぬ

一電線に施してある絶縁物は、いつでもショックを防ぐことの出来な
 いものと思つてゐた方がよろしい、又ショックを受けた場合でも高い
 處から落ちるやうなことのないやうに要小心してゐなければならぬ

一絶縁臺に昇つて仕事をしてゐる人の體に觸つてはならぬ

一サークキトブレーカーを飛ばぬやうに縛つて置くやうなことをしてはならぬ

一油入開閉器及びコンペンセーターが線から全く切り離されてゐなければ、油槽を取脱してはならぬ

一何んでも仕事をした後で、道具や材料を高い所に置いてはならぬ

電動機運轉の心得

一電動機の運轉を初める前には、先づ手でベアリングメタル、オイルリングを廻はして見、且つ油が有るか無いかを検査し若し有つても濁つて居つたならば取換へること

一次に開閉器、リレーを取調べ、水抵抗器を用ふるものは、水が平均し

て居るかどうかを見、シャートスネツチが脱されて居るかどうかに氣を留めよ、又コントローラーを用ふるものは、油の有無、フキンガー、抵抗器の具合等を検査せよ

一 電働機をスタートするには成るべくそろ／＼と初めること、而して回転の出るに従ふて抵抗器やコントローラーを次第に入れること。

一 電働機に就ては左の事柄を克く注意すること。

(イ) 電働機の發する響に氣を付け、若し異つた響の出るときは直に係員に知らせること。

(ロ) 電働機の熱する度合を検査し、若しコアの一部分が甚しく熱したときには、直に係員に知らせること。

(ハ)ベアリングメタルが熱し過ぎるやうなときも直に係員に知らせることに。

一ベアリングに塵埃や砂の入らぬやうに氣を付けること。

一ベアリングの油は餘り黒くならぬ内に取換へること、又油に泡の立つのは熱し過ぎた爲めであるから氣をつけること。

一ベアリングに油を注ぐときは外へ溢れないやうにすること。

一電働機の近くにセメントとか砂とか、其他飛散り易いものを置いてはならぬ。

一電働機を運轉するとき、妙な響を發してスタートしないときは、一線の開閉器のコンタクトが悪いか、又はヒューズが一本切れてゐるかで

あるから氣をつけること。

一 電働機モーターの運轉うんてんを停めたときには、次の事柄つぎのことからに注意ちゅういすること。

(イ) 電働機モーターの埃ほこりや油あぶらを拭き取り、水抵抗器みづていかうきを清め、鑄物抵抗器いものていかうきのホートを締め直すこと。

(ロ) ステートルとロートルの隙間ギヤツブの片側かたわきに蠟燭ろうそくを立て片側かたわきから透すかして見て、若し隙間ギヤツブが片寄かたよつて居ゐるのを見みたときは直ただちに係員かゝりんしに知らせること。

一 捲揚機まきあげきの電働機モーターを運轉うんてんするに、ブレーキを使つかふ場合に、コントロラーにより逆回轉ぎやくゝわいてんのノッチを使つかふことは電働機モーターの壽命じゆめうを縮ちぢめるものであるから、これを避さけなければならぬ。

一電機機^{モーター}の運轉^{うんてん}を停^とめるとき、唧筒^{ポンプ}やターボブローなどは、先^まづデリバリバルブを締^しめ、荷重^{ロード}を滅^{めつ}し、電流^{でんりゅう}の降^{くだ}るのを待つて開閉器^{スキッチ}を切^きらなくてはならぬ。

電車運轉の心得^{でんしゃうんてん ころえ}

一電車運轉手^{でんしゃうんてんしゅ}は電車路^{でんしゃみち}の兩側^{りやうがはまた}又は上^{うへ}の狹^{せま}い所^{ところ}を能^よく覺^{おほ}えて置^おいて、其處^{そこ}を通^{とほ}るとき氣^きをつけること。

一モーターは勿論^{もちろん}、アーマチュア、コンミユテーター、ブラシホルダーなどは常^{つね}にきれいにして、塵埃^{ほこり}を着^つけたり、濕^しめらせたりしてはならぬ。

一車を停^とめてゐる間^{あひだ}はトロリーホキールを引離^{ひきはな}して置^おくこと。

一 發車はつしゃのとき、双方さうほう擦違すれちがふとき、前面まへに人の居ゐるとき、坑口こうくちや曲まがり角かどを

通とほるときには必ず鈴かねを鳴なららし、速力すみよりを緩ゆるめること。

一 急きよに發車はつしゃすると電働機モーターや車くるまを傷いためるから靜しづかにノツチを入いれなければならぬ。

一 阪路さかみちを上のほるときには、再び發車はつしゃしにくいやうな所ところで車くるまを停とめてはならぬ。

一 已やむを得えない場合はあひのほか、曲線路カーブの上うへに車くるまを停とめてはならぬ。

一 阪路さかみちを下くだるときは電流でんりゅうを切きつて置おくこと。

但たゞしブレーキきが利きかなくなつたときの要心えうじんに、トロリーホキールは線せんから離はなさずに置おくこと。

一 發車はつしゃするときには必ずブレーキを緩ゆるめること。

一 ブレーキを締しめるときは電流でんりゅうを切きること。

一 水みづの中なかを通とおる場合は出で來きるだけ速力そくりよくを遅おそくすること。

一 セクション、インシュレーターを通とおるときは車くるまの電流でんりゅうを切きること。

一 車を逆さかに動うごすとは危き險けんを避さけるため已やむを得えないやうな場ば合あひのほか、

やつてはならぬ。

一 停電ていでんのときはコントローラーハンドルをオフの所ところに置おいて電力でんりよくの來くる

のを待まちつて居ゐること。

一 油注あぶらさしのやうな金屬きんぞくを用もちふるときには、トロリーホキールを電線でんせんから引ひき

離はなして、自じ分ぶんの體からだが乾かはいた板いたのほか何物なにもにも觸ふつてゐないやうにしな

ければならぬ。

一 電車進行中レールの接續點にスパークを認めたとき又は或る接續點を通過した後で急に速力が異つて來たやうなときには、直に係員に知らせなさい。

一 電車進行中の響に耳を馴らして置いて、若し妙な響を聞いたときは其原因を調べて係員に知らせなさい。

電車に就ては第一採鑛の中「電車に就ての心得」をも参照すること。

トラベリングクレーン運轉の心得

一 常に電動機やコントローラーをきれいにしておかなければならぬ、殊に煉銅工場は塵埃の飛ぶことがはげしいから一層掃除に念を入れなけ

ればならぬ。

一 常に齒車やギアのキーの緩まぬやうに注意せねばならぬ、電動機を空廻させることは最も好くない。

一 クレーンを修繕するときには、好く熟練して居るものゝ外は、メインスイッチを切つてからでなければクレーンに昇つてはならぬ。

一 右のクレーンに再びメインスイッチを入れるときには、クレーンの上にも又其の通路にも人の居らぬことを確めた上でなければならぬ。

一 不意に電氣が停つたときは直にすべてのスイッチを切りコントローラをオフの位置に置くこと。

一 どんな場合にも他のクレーンを修繕して居る者に危険のないことを確

めた上^{うへ}でなければ、此方^{こちら}のクレーンを動か^{うご}かせてはならぬ。
一クレーンに人^{ひと}を乗^のせて運轉^{うんてん}してはならぬ。

第四 機械

機械は工場の中で一番大切なものであるが此の機械を運轉したり、修繕したりする「人間」は尙ほ大切であるから、克く自分の身を守り、又機械を守らなければならぬ。

機械運轉の心得

一 機械の取扱ひには克く念を入れ、又油を注すことを怠つてはならぬ。
 一 機械のある室の中には常に能く掃除をし、油や檻縷の類は、其置場を定めて置いて決して取散らしてはならぬ。

一 交代のときは、自分の就業中に起つた事故や、機械の具合の悪い所な

どを次の者に能く話して置くこと。

一 機械や調帯に故障のあつたときは直に係員に知らせて指圖を受けること、但し若し急に重大な故障の起つたときは直様其の運轉を停めること。

一 油を注ぐときや、掃除をするときには、克く氣を付けて、機械の危険な部分や、調帯に觸らないやうにすること。

一 どんな場合でも運轉して居る機械や調帯の上を跨いだり、飛び越えたり、下を潜つたりしてはならぬ。

一 機械室に無用の者を入れてはならぬ。

一 機械の運轉を停めないで修繕をしてはならぬ、又他の者にさせてもな

らぬ。

一 機械の運轉を始める前には、機械の各部に故障のないこと又危険な場所
所に人の居らぬことを克く確めなければならぬ。

一 機械運轉を始めるとき又停めるときは、徐々としなければならぬ、殊
に、送風機の運轉を始めるには必ず係員の指圖に依らなければならぬ。
一 機械の傍に人の蹟くやうな物を置いてはならぬ、又歩いて居る内に

つて轉げるやうな虞のないやうにして置かなければならぬ。

一 機械の傍にある階段の上下には克く氣を付なければならぬ。

一 何人も係員の許なしに決して機械に觸つてはならぬ、又自分の着物が
機械に引懸らぬやう注意せねばならぬ。

機械製作修繕の心得

一 鑄型を作るために用ひた釘は、砂篩のとき残らず拾取らなければならぬ。

一 熔けた金屬を運ぶときには其容物に故障のないことを確かめなければならぬ、又運んでゐる間に落ちたりすることのないやうに氣を付けること。

一 すべて材料を積重ねて置くときには、崩れたり轉げたりすることのないやうにしなければならぬ。

一 ハンマーを使ふときには、克く附近に氣を付けて過失のないやうにしなければならぬ。

一 金屬の破片の飛散るやうな仕事をするときには、其附近に人を寄付け
てはならぬ。

一 エヤーハンマーでは熱してゐない鐵材を叩いてはならぬ。

一 人の通るべき所に道具や材料を置いてはならぬ。

一 すべて物を放投げたり落したりしてはならぬ。

一 運轉してゐる齒車の掛替をしてはならぬ。

第五 土木

土木の仕事は重い木材や石を取扱つたり、高い足場の上でする仕事が多く、従つて亦危険も多いわけであるから、克く要心しなければならぬ。

土工石工の心得

一 土砂を運ぶための足場は墜ちる虞のないやうに確固と架けて置かなければならぬ。

一 土砂切取のときには片隧道のやうに堀つてはならぬ。

一 間知石や才石を採るときには破片の飛散らぬやう氣を付けること。

一 石や土を運ぶ畚の綱は、途中で斷れることのないやうに、常に丈夫な

ものを用ひること

一 重い石を運ぶときには餘り急いではならぬ。

一 往來の人の邪魔になるやうな所に石を置放しにしてはならぬ。

一 石を積重ねて置くときには崩れたり轉げたりすることのないやうにして置かなければならぬ。

一 仕事場の下の方に往來のあるときは石や土を落さぬやうにしなければならぬ、若し落さなければならぬときには、人が通つてゐない事を確かめた上にしなければならぬ。

一 石の爲に指端を挟まれたり、足の甲を撲たれたりせぬ様に注意すること。

大工 鳶夫の心得

一最も克く氣を付けなければならぬのは足場である、決して確固してゐない足場の上つてはならぬ。

一足場の上を歩くときには、いくら慣れて居るものでも、克く要心して、決して大膽な真似をしてはならぬ。

一足場を架けるととき丸太を墜してはならぬ。

一足場を取崩すとき、丸太を横倒に投下してはならぬ。

一すべて木材を廊下や壁などに立てかけて置いてはならぬ。

一斧や手斧を使ふときには足の端を傷けぬやう注意すること。

一釘は一本でも放散らしたまゝにして置いてはならぬ、新しい釘は勿論、役に立たなくなつた古釘でも拾うて持つて歸つた方がよろしい。

一 釘くぎの附ついて居をる板いたを仕事場しごとばや人ひとの通とほる場所ばしょに捨すて置おいてはならぬ。
一 梯子はしごの上下のぼりくだりには、梯子はしごが倒たれたり、脱はれたりすることのないやうに氣きを付つけること。

第六 運搬

運

運搬はすべて速いことを貴ぶ、然しこの速いといふことが危険を伴ひ易いのであるから、過失なしに速くすることが大事である。

一般の心得

一何によらず不完全な運搬具を用ひてはならぬ。

一運搬物は其容物に餘り澤山入れすぎてはならぬ。

一人の乗るべきものでない運搬具に乗つてはならぬ。

一線路に故障のあつたときは、無理に通さうとせず、係員に知らせなさい。

搬

鐵索に就ての心得

一 搬器と搬器との間には必ず定まつた隔りを置かなければならぬ。

一定まつた重さ及び大きさ以上の物を載せてはならぬ。

一 搬器のクリップは常に十分鐵索を噛んでゐなければならぬ。

一 搬器に物を入れるとき、又搬器から物を出すときは克く注意すること。

一 油注夫は常に脚下に氣を付けて、迂り落ちないやうにしなければならぬ、

又ローラー、ビームなどの不完全なものがあつたときは係員に知らせ

なさい。

馬車に就ての心得

一 馬丁は常に馬の性質に氣を付けて、悪い癖のある馬は特に克く用心し

なければならぬ。

一馬のびんづなを弛めすぎではならぬ。

一線路の曲つた所、交叉した所、分岐した所では克く氣を付けること。

一徐行區域と定めてある所では必ず速力を緩めなくてはならぬ。

一汽車の線路に近付いたときには、大丈夫といふことを確めた上で通ら

ねばならぬ。

一火薬を運搬するときには克く係員の指圖を聞いて、決して自分の思ふ

まゝにしてはならぬ。

電車に就ての心得

電車に就ては第三電氣の中の「電車運轉の心得」及び第一採鑛の中の「電車に就ての心得」として掲げたるものに依ること。

第七 林業

林業の仕事は勾配の急な山や、狭くて曲りくねつた山路で、重い大きな材木を伐つたり、搬んだりする危険な仕事であるから、克く用心しなくてはならぬ。

伐木に就ての心得

一 立木を伐るときには、まづ其木の幹、枝の具合で、どちらに倒れるかといふ事を見定め、且つ根廻りの岩や土の様子を調べた上で、必ず足場を設けること。

一次に幹の下の部分にある枝や其他の邪魔物を切拂つてから、木の伐倒

しに着手ちやくしゆすること。

一木を伐るときには受口うけぐち四分、追口おひぐち六分の割合で斧を入れること、若し受口うけぐちの切込みが浅過ぎると、途中で幹が裂けたり意外の向きに倒れたたはりすることがあるから氣を付けなければならぬ。

一木が倒れさうになつたときは、直に切込みを止めて、安全な場所に退のかなくてはならぬ。

一木を伐つて居るときは、附近に氣を付けて、若し人が近寄つたときは一々合圖することを忘れてはならぬ。

一根倒ねたほしが済んでも直ぐ近寄らないで、地が崩れてはゐないか、傾斜けいしゃが急きよで顛倒てんたうするやうなことはないかといふやうなことを確めてから、枝拂

ひに着手ちやくしゆすること。

一 倒たほれた木きが、滑すべり落おちたり、顛倒てんたうしたりしさうなときには、支柱しちゆうを用もちひるか又は木きの上方うへのはうの端はしを綱つなで留とめて置おかなくてはならぬ。

木材運搬に就ての心得もくざい うんはん につい こころえ

一 木材もくざいを落おとすときには、下したの路みちに見張人みはりじんを置おいて、通行人つうかうじんに合圖あひづをすること、下したに路みちのない所ところでも人ひとが通とほらぬとは限かぎらぬから克よくく氣きを付つけて危険きけんを避さけること。

一 棧手さでを使つかふときには、雨あめや雪ゆきや氷こほりのために滑すべつて、案外あんぐわいな方はうに飛とぶことがあるから用心ようじんしなくてはならぬ。

一 山路やまみちを歩あるくときは常つねに足あしの爪尖つまさきに力ちからを入れて、小足あしに歩あるくこと。

一 鳶口とびぐちを使つかふて大勢おほせいで木材もくざいを動かうごかすときには、皆みなの力ちからの入れ具合ぐあいを一様やう

にするやうに努つとめなければならぬ。

一 鳶口とびぐちの尖端さきは能よく尖とがらせて置おくこと。

一 積木つみきをするとき又は積木つみきを取卸とりおろすときには木材もくざいの緩ゆるみに氣きを付つけて轉ころび

落おちないやうにせねばならぬ。

一 土櫓どそりを使つかふときには、路みちの上うへにある石いし、枝えだ、蔓草つるくさなどを取除とりのけて、蹶つまず

くことのないやうにしなければならぬ。

一 雨あめや雪ゆきの降ふつたときは、土櫓どそりが大變滑たいへんすべり易やすいから、積荷つみにを輕かるくし、算そろ

盤木はんきを取除とりのけるとか、砂すなを撒布まきちらすとか、金輪かなわを附つけるとかして、滑走すべり

を止とめる工夫くふうを忘わすれてはならぬ。

一物を背負ふて歩くときには必ず背負梯子を用ひ、側見をしないやうに
すること。

第八 導火製造

導火の製造は一番危険の多い火薬を取扱ふのであるから、克く心得の個條を守つて、すこしも油斷があつてはならぬ。

一般の心得

一 烟草、燐寸、鋼類、其他火を發し易い物を携へて入つてはならぬ。

一 土足のまゝで入つてはならぬ、必ず備付の草履をはくこと。

一 歩くときは床板を擦つたり、走つたりしてはならぬ。

一 已むを得ず夜中に入るときには入口の外で角燈に蠟燭を點け、燐寸を措いて入ること。

仕事場の心得

すべて物を搬ぶときには、これを引摺つてはならぬ、又自分の力に餘るやうな重い物を持つてはならぬ。

一 仕事の材料や道具は定つた場所の外へ持つて行つてはならぬ。

一 機械の故障のあつたときは無理をせず直ぐ係員に知らせなさい。

一 火薬挽きの室には猥りに人を入れてはならぬ。

一 火薬の中に金屬や砂などの交ぜらぬやうに氣を付けること。

一 火薬の取扱ひはすべて手荒くしてはならぬ。

一 仕事中に飛散つた火薬は時々きれいに掃取らなければならぬ。

大正四年一月十日印刷
大正四年一月十五日發行

(非賣品)

栃木縣上都賀郡足尾町二千二百八十一番地

編輯兼發行人 林 癸未夫

東京市牛込區榎町七番地

印刷人 渡邊八太郎

